

窓

視 る

教養部長

岸 正 倫



わが家にジュンという名の柴犬がいます。日進町に引越して間もなく、生れてまだ日が浅いときから飼いはじめましたから、12才になる老犬です。この老犬がこの春先体調をくずし、歩くのが困難なまでに衰弱して、長くはないでしょうと獣医に言われ、もうあきらめていました。しかし、注射と薬のききめがあって、看護もよかったのでしょう、すっかり体力をとり戻し、気がむけば庭をとびはね、ボールをくわえてきて一緒に遊べと催促する程に回復しました。

このボール遊びは、投げられたボールを追いかけてくわえて戻ったり、バウンドするボールにとびついてくわえたり、トスされたボールを口でキャッチするという単純な遊びです。小犬のとき覚えた彼の得意技の一つです。もっとも、老犬となった彼には口でキャッチするのはもう無理です。彼の得意技に「野鳩追い」もあります。これも小犬だった頃、その頃野鳩の糞に悩まされる団地の騒ぎが新聞記事になったことがあります。電線にとまっていた一羽の野鳩が庭におりてきたのを一度私が大声で追払ったのを見て覚えたらしく、それからというもの、まれに庭に現れる野鳩の姿を見ると追っかけます。野鳩は追っかけるがそのほかの鳥には知らん顔です。その無関心なことは徹底していて、雀たちが彼のえさを失敬して

いてもその脇で寝ているのです。ヒヨドリがきても同じことです。彼は野鳩とほかの鳥とをどのようにして区別するのでしょうか。単に視力によるとは思われません。先程のボール遊びは、汚れた黄色いテニスボールに限られ、白い野球ボールを投げてやっても見向きもしません。重い野球ボールを口にくわえるのが苦手なため、小犬の頃以来これは駄目だと決めているからです。色盲の彼が同じような大きさの二つのボールを色の違いで区別している筈はありません。単に視力だけではなく、彼のすぐれた聴覚、臭覚などを役立てているのでしょう。

見えない筈なのにどうも視えているようだと感心させられることがほかにもいろいろあります。足音とか自動車の音を聞き分けることは、ごく平凡な例でしょう。塀の向う側を通る犬や猫は、視点の高さの低い彼にはその姿をみることはできないのですが、吠えかかることがあります。それもその相手が決まっているようなのです。吠えかかる最初のきっかけが何だったのか、そしてそれをどのようにして他から区別しているのか、彼の答えを聞きたいものです。

スポーツの技をみがくには、技そのものの上達に努めることは当然としてそれ以外に鍛えるべきことがさまざまにあるのでしょうか。どのスポーツでもまず対象をよく見なければなりません。それも、見えるものを単に見るというだけではなく、瞬時に正しく判断し行動しなければなりません。それが可能となるための鍛練が欠かせません。それは、スポーツを離れても同様でしょう。スポーツの場を離れても鍛練というのは不適切な表現ですが、自らを律し努力する必要があるでしょう。